

台湾養豚グループから知るグローバルピッグファームの活動

グローバルピッグファーム(以下 GPF)では生産者の活動として毎年メンバー農場で働くご婦人を対象にした養豚研修を行なっています。本年は GPF 設立 25 周年の記念の年でもあり台湾大学名誉教授の宋永義先生の計らいで台湾研修を行いました。口蹄疫の侵入後、日本向けの豚肉輸出がゼロになり壊滅的な被害を受けた台湾の状況は、隣国でありながらなかなか知りえぬ世界です。

台湾の東部(養豚地帯は西部)で活動する龔(キョウ)首席のグループは、実は6年前にグローバルを勉強するために来日されました(写真)。その際に学んだ弊社の活動をいろいろな形で応用されています。GPF の活動の一端を台湾の生産者から感じ取ることは大きな喜びでした。

以下は、組合長の龔氏のお話を宋先生の通訳でまとめたものです。



平成 14 年 ハム工房前で 台湾養豚グループの研修団一行

『年間出荷頭数が 2,000 頭を下回るような小規模農家では、かなり厳しい経営状況は必須です。またわれわれの活動している花蓮縣(台湾の東部に位置する)は南北に長く、また交通の便も悪いため、養豚地帯である西部の農家に比べ飼料や機材などの仕入コストは 2 割増しになります。グループ化しなければ絶対やっつけられないだろうということは 6 年前の GPF 視察で痛感し、グループ化の意義を改めて再確認したのです。

グループ(組合として活動している点も同じ:GPF は全国レベルで組合活動をしているために株式会社組織にしました)は設立時 12 戸の農場でスタートし、現在 18 戸の農場と 16 名の職員で構成されています。花蓮縣の中でも太平洋側、中でも玉里地区に多くの農場があります。組合の年間出荷頭数は現在約 16,200 頭です。

GPF ほどの規模ではないけれども、種豚と飼料を統一して最終産物である豚肉の品質を重視した経営方針は、GPF と全く同じ方針です。

今回ご紹介する蓮貞牧場は、口蹄疫前から生き残った台湾で唯一、かつ屈指の SPF 種豚場です。蓮貞牧場が「SPF 猪肉」として、他の 17 戸が「花蓮網室健康猪肉」という銘柄豚で出荷しています。後者は豚舎の開口部に網を貼って渡り鳥や害虫の侵入を防ぎ、また豚舎の衛生レベルも一般的な農場より高く保つ生産システム(網室式)のため、SPF に準じた銘柄豚として出荷しています。

GPF から学んだ種豚の統一、餌の共同購入を活かしてコスト削減に成功しました。飼料コストでは 10% の削減ができたので、その中から組合運営費(基金)に充て、海外研修なども積極的に応援しています。共同出荷で最低保証価格(4,000 元/100kg:基金より)を設定し、農家の収入安定にも努めている点がユニークでしょうか。

GPF を視察して取り組もうと考えたのは、自分たちでパッキング工場を作り二次加工した製品で直接消費者に販売することでした。今では 200 種類もの加工品を作り、単なる精肉としてではなく付加価値をつけていま

す。また食肉流通においても改革し、他にゆだねることなくすべて自分たちで流通するように努めました。さらに他の農業組合とも連携し、広く自分たちの商品がいきわたるように営業努力もしているところです。

組合ではテーブルミートとして宅配販売も行っています。そして大切なことですが他の生産者の豚肉が絶対に混ざらないようにしていることです。

農業組合の理事をしていた経験を生かし、他農業(畑作など)と連携し商品開発をしている点も特徴的だと思います。例えば出荷が出来ないキャベツを、無農薬を条件に市場価格の4倍で買い取り、売りにくいモモ肉の部分を使って、ギョウザなどの惣菜として加工販売するなど知恵を絞って取り組んできました。

GPFと同じように後継者、次世代のリーダーを育成するよう特に力を入れています。

当組合は創立してから11年経ちましたが、設立当初は3ヶ月持てば良いといわれたものの、皆が一枚岩となり、GPFを目標に頑張ってきたおかげでここまで来ることが出来ました。これからもGPFのような成長ができるように努力していきたいと思います。』



蓮貞牧場にて。横断幕は中国語で中央にグローバルピッグファーム株式会社(全球養猪公司)。弊社ご婦人方も大変良い交流ができたと思います。中央のオレンジのシャツが龔氏その左が宋先生

2008年11月 グローバルピッグファーム(株)